

# 夏目漱石『心』研究

——「同情の糸」のつながりもの——

前 田 友 美

一

『心』における先生と「私」のつながりについてはこれまで数多くの先行研究がある。それを踏まえながら、あらためて、先生と「私」がどのようなつながりを持っていたかということについて述べたい。本論の最後に、『行人』（大正元年12月～大正2年11月）と『心』との間の大きな違いがどこにあるのか、自分なりにつかみたい。

「私」は言うまでもなく先生の影響を強く受けた人物である。最初に、「私」が両親、特に父から受けた影響が、『心』の中で、どのような役割を果たしているかについて考察する。「私」が無意識のうちに自分の父と先生とを比較している描写には次のようなものがある。

私は心のうちで、父と先生を比較して見た。両方とも

世間から見れば、生きてゐるか、死んでゐるか分らない程大人しい男であつた。他に認められるといふ点からいへば、何方も零であつた。それでゐて、此将棋を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。（上 二二三）

次に挙げるのは、「私」の大学の卒業証書を前にした時の二人の反応である。先生と父を比較しながら、「私」は次のように思う。

私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなしてゐる先生の方が、それ程にもない物を珍しさに嬉しがる父よりも却て高尚に見えた。私は仕舞に父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した。（中 一一）

先生は自身の卒業証書を何処かに仕舞い忘れてしまつてゐる。<sup>(注1)</sup>先生の、權威にこだわることをしない性質がここから伝わってくる。「私」が先生から遺書を受け取り、東京へ向かおうとする場面へ向けて、「私」が先生と父を比較している描写が見られる。<sup>(注2)</sup>しかし先程挙げた「中 一」での「私」の卒業証書を巡る場面で、「私」が次のように思っていることにも留意すべきであると思われる。

私は一言もなかつた。詫まる以上に恐縮して俯向いてゐた。父は平気なうちに自分の死を覚悟してゐたものと見える。しかも私の卒業する前に死ぬだらうと思ひ定めてゐたと見える。其卒業が父の心に何の位響くかも考へずにゐた私は全く愚ものであつた。(中 一)

その時の「私」には、腎臓の病気で永くないと自覚している父の、自分が無事に大学を卒業した事を心から喜ぶ気持ちが見えていなかったのである。父に対して「私」がこのような思ったのは、時を経て、手記を書く現在の段階になつた「私」が、やはり肉親の情とも言うべき血の繋がりを感じ取つて、今でも悔やまれるような感覚を持ち続けているということが考えられるだろう。先生の考え方に傾

倒するあまり、父親が息子の卒業を祝う、いわば当然の心情が「私」にはすぐに分からなかつたということは、下宿時代の先生が、御嬢さんの自分に対する好意に気が付かなかつたという事実とも関連してゐるのではないだろうか。<sup>(注3)</sup>先生と「私」の父の大きな相違点として考えられるのは、自分の死に対する受け止め方であると思われる。先生は「私」に「君のうちに財産があるなら、今のうちに能く始末をつけて貰つて置かないと思ふがね」(上二十八)と忠告している。その一方で「私」の父については次のような描写がされている。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。(中 十六)

自分の死を身近に意識している先生と違って、「私」の父は眼前に迫る死の恐怖を受け止めかねてゐると考えることができる。<sup>(注4)</sup>

しかし、先生、「私」の父のそれぞれの死によつて、後に残される妻の心情は大きく異なつてゐると考えられる。夫を看取ることが出来るお光と異なつて、静は夫を看取ることはおろか、夫の死の本当の理由さえ知ることは出来な

いのである。静とお光の二人に共通して遺されるものは家である。その一方で、お光に子供があり、静にはいないということも大きな相違点であるといえよう。<sup>(註)</sup>

「中 一」と同じ場面で「私」の卒業証書について次のような描写が見られる。

証書は何かに押し潰されて、元の形を失つてゐた。父はそれを丁寧に伸した。

「こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」

「中に心でも入れると好かつたのに」

と母も傍から注意した。(中略)一旦癖のついた鳥の子紙の証書は、中々父の自由にならなかつた。適当な位置におかれるや否や、すぐ己れに自然な勢ひを得て倒れやうとした。(中 一)

この場面から、「私」の父と母が、ほとんど気持ちと同じくする人物として描かれているということが言えよう。母は父に従順であり、父が重い病気で明日をも知れぬ時になつても、現実には迫り来る死を受け止めようとしなない。母が予想される父の死を受け止めようとしなないのは、静が先生の死を想像してないことも重なつていくとも考え

られる。しかし「私」の両親が気持ちを同じくする夫婦として描かれていることに対し、先生夫婦は、Kとの過去があり、気持ちが重なり合うことはなかつたと考えられるので、その点も大きな違いであると思われる。

その一方で、この卒業証書の「己れに自然な勢ひを得て倒れやうとした」という擬人法的な表現に「私」が、両親でなく、先生と同調していく様子が描かれていると思われる。「私」は、父や兄の言いなりになることなく、家から独立して、自分なりの生き方を懷疑的に模索していくのではないだろうか。手記を書いている現在の「私」の様子を暗示している表現であると考えられる。卒業証書という一つの物に対して、「私」が先生と父の両方の考え方の中間にあつて、揺らいでいるのが窺えるのである。また、先生と「私」に共通して見られる表現の一つとして、「遠眼鏡」が挙げられる。

然し東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡で物を見るやうに遙か先の距離が望まれる丈でした。

(下 五)

下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のやうにぐる／＼巻いた卒業証書の穴から、見える丈の世の中を見渡し

た。(上 三十二)

先に挙げたのが先生で、後が「私」であるが、先生は自分が叔父によって早く父の後を相続しろと迫られていることに実感を得られないという場面であり、「私」は大学を卒業したばかりで、自分の進路を漠然としか考えることができないという場面である。「遠眼鏡」という表現が共通して表していることは、先生と「私」が、現実に対して正面から受け止めきれず、共に狭い視界の中でフィルターを通して世の中しか見えていないということであろう。先生も「私」も共にかつての自分に対して述懐を込めた表現であることが窺<sup>(注6)</sup>える。

「私」と先生の関係について三浦泰生氏は次のように指摘されている。

私と父とが肉体上の親子であるならば、私と先生は正(注7)に精神上の、あるいは魂の上での親子に他ならなかつた。

三浦氏が指摘された通り、「私」は、先生の考え方の影響を強く受けて、変化していく人物であり、「私」が先生

を心から慕っているということは疑いようのない事実である。その一方で、成人する前に両親を喪い、叔父の財産の誤魔化しに遭つて、故郷を喪失した先生と異なつて、田舎という故郷を持つ「私」には、やはり血の繋がりを持つた父の存在を、先生に比べて軽視するということは出来ないと思われる。「私」は父と先生から等しく影響を受けた人物として描かれている。「私」が父から受け継いだと思われるものは己の命と、眼に見える、母と家であり、先生から受け取つたものは、一生の支えとなつていく、眼には見えない、精神のうへの命である。

## 二

先生と「私」のつながりを示すものとして次に挙げる「同情の糸」という言葉がある。私は手記を書きながら述懐する。

今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきもの、一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働き掛たなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦も

なく其時ふつりと切れて仕舞つたらう。(上 七)

ではないだろうか。

ここでの「同情の糸」の「同情」は、言うまでもなく、相手に対する憐憫の情を含んだ上から下への感情ではなく、気持ちと同じくするもの、という意味で使われている。<sup>(註8)</sup>『心』の冒頭で、「私」が先生に対して「私は其人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」と云ひたくなる。」「上」と言っていることから、「私」が先生に対して抱いている感情は、尊敬の念を含んだものであることがわかる。「私」と先生がこのように強く結びつくことができたと感じた瞬間は、次の場面ではないかと考えている。先生は「私」に次のように問い掛ける。

「あなたは本当に真面目なんですか」

(中略)

「私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。あなたは腹の底から真面目ですか。」(上 三十一)

ここで「私」が次のように答えたことが、重要だったの

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です。」私の声は震へた。

(上 三十一)

先生が「私」を真面目だと認め、遺書を託したのは、「私」が声を「震」わせながら、先生の過去を受け止めるために、自分の「命」という言葉を持つて応えたことが大きな理由だったのでないだろうか。だからこそ、自分も命を懸ける覚悟を決めたのである。

私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔の浴びせかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。(下 一一)

先生の「巻煙草を持つてゐた其手が少し顫へた」(上 三十一)という「顫へ」は私へと伝染し、共鳴していくものである。先生にとつて過去とは現在の自分を構成する原因そのものであった。先生は、今なお自分を苛み続ける暗

い過去の中から「真面目に人生そのものから生きた教訓を得たい」(下 一)と言った「私」の言葉を受けて、遂に自分の過去を真正面から受け止める覚悟を得たのである。先生は、正面から自分に向き合つて、その傷口を見たいと言つてくれる人物が現れたことに心から驚き、恐れ、また喜びに「震」えたのではないだろうか。先生との間を阻む壁が先生の過去にあると「私」は気づき、その壁を破ろうとした。それほどの意味を、「私」の発言は持つものであろう。静にはどうしても話す訳にはいかなかった自分の過去の罪を、告げる相手に出会えたことが、先生の心を震わせたのではないだろうか。先生と「私」の関係を竹盛天雄氏は次のように言われている。

手記は若い「私」が自分を挑発者に仕立てて「先生」を告白に追い込む経緯をたどりなおしているが、「先生」は、そのような挑発者を待ちのぞんでいたともいえ、むしろ誘惑者と呼ぶのが適当かもしれぬ。<sup>(注)</sup>

「私」の存在は先生にとつては待ち望んでいた人物であるといふことができるが、竹盛氏のように、「私」を果たして「誘惑者」と呼ぶことができるだろうか。先生の眼に

映る「私」はもつと「単純」(上 三十一)だったのでないだろうか。先生が「私」に対して次のように言つていふことも見逃してはならない点だと思われる。

たゞし受け入れる事の出来ない人に與へる位ならば、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬つた方が好いと思ひます。實際こゝに貴方と云ふ一人の男が存在してゐないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでせう。(下

二)

しかし「私」と本当に心が繋がつたと思われた瞬間に、同時に先生は自分の死を明確に意識し始めるようになる。

「よろしい」と先生が云つた。

「話しませう。私の過去を残らず、あなたに話して上げませう。其代り……。いやそれは構はない。(後略)」(上 三十一)

先生はこの場面において、自分の死を目前に意識したといえるだろう。私が記した「同情の糸」の「糸」とは、切

望しつづつ長いこと得られなかったが、時を経て、漸く繋がった、確かな関係の比喩であるのかもしれない。それと同時に、先生の死の影によって不安定にならざるを得なかった、二人のつながりを表す表現であるといえよう。

### 三

これまで先生と「私」のつながりについて、共通点を主に考察してきたが、相違点も窺える。『心』の中には「現代」という言葉が多く見られる。漱石が時代性を意識していたのは確かだろう。先生は次のように「私」に語っている。

「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はなくてはならぬいでせう。」(上 十四)

「私」と先生の考える「自由と独立」の意味について山崎正和氏は次のように論じられている。

彼らの自由は他人を支配する自由ではなく、いかなる他人からも支配と制肘を受けない、という意味での

自由にすぎないといえる。(中略) 彼らはほとんど病的なまでに、人間関係のなかで純粹な主体であることに徹しようとしている。<sup>(注10)</sup>

山崎氏は、先生と「私」が、家という枠組を超えたところに、自分の生きる道を確立しようと模索している点について関心を持たれている。それは実家からも養家からも離れて、独力で生きていこうとしていたKについても同様のことが考えられるであろう。

「現代」とは、先生及びKの世代、「私」の世代を含めた、一つの時代を表すものである。かつて先生に淋しいかと聞かれ、「ちつとも淋しくはありません」(上 七)と答えた「私」ではあったが、田舎の故郷にいる間に、次第に淋しさを感じるようになっていく。しかし、先生の淋しさと、「私」の淋しさは必ずしも重なるものではないと指摘されたのは関谷由美子氏である。

「私は淋しい人間です」と「先生」は繰り返す。しかしその(淋しさ)の性質は「たつた一人で淋しくつて仕方が無くなつた結果」「所決」「先生の遺書」(五十三)へと向ってゆくような、人間に背を向けた

ものである。その淋しさは「私」のように、他者との共生を願う、人間の本性に根ざした（生）<sup>（注11）</sup>の方向を指す（淋しさ）と明らかに対照されている。

先生の淋しさと「私」の淋しさは、関谷氏の言われる通り、厳密には異なるものだと思われる。少なくとも「私」は先生の過去を知った上で、先生と「温かい交際」（上七）が出来たと感じているからである。遺書の終盤で時代性を意識した、「時勢」という言葉がいくつか登場する。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。（下 五十五）  
（中略）

私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに貴方にも私の自殺する譯が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は個人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かか

もしれません。（下 五十六）

「時勢」とは、先生と「私」の差異化を図るための言葉ではないかと思われる。<sup>（注12）</sup>それは、先生の影響を受けるばかりの存在で終わらない「私」の生き方を暗示させるものである。関谷氏は「私」と先生について次のように言われている。

「私」は瀕死の父を見捨てて「先生の安否」（十八）を確かめるために汽車に飛び乗ってしまった。しかし「私」はこの時「先生」と父とを（取捨選択）したのではない。（自然の衝動）が「私」を突き動かしたの然立つて「夢中で」「思ひ切つた勢で東京行の汽車に飛び乗ってしまった」のである。この一つの（衝動的行為）が産み出す、現実の大いなる不可測性のうちに手記は（中断）という形で終つている。それに対して、〈遺書風の手紙〉は、それを書いた「私」が、人生の決定的瞬間において、このような（自然の衝動）が唯一の一度も訪れることのなかつた人物であることを示しているのである。<sup>（注13）</sup>



関谷氏の指摘された通り、先生にとつての「自然」は多くの場合において遮られているといえる。それは次に挙げる、先生が、Kが大学へ行っている間に、仮病を使って機会を作り、御嬢さんに結婚を申し込んだ場面に如実に表れているといえよう。

彼は

「病気は、もう癒いのか、医者へでも行つたのか」

と聞きました。私は其刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりなくなつたのです。しかも私の受けた其時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立つてゐたならば、私は吃度良心の命令に従つて、其場で彼に謝罪したらうと思ひます。然し奥には人があます。私の自然はすぐ其処で喰ひ留められてしまつたのです。さうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。(下 四十六)

この場面について酒井英行氏は次のように述べておられる。

人間が人間として生きていくかぎり、「曠野の真中」

などという状況がありえるのか。「奥には人があます」という状況にあることこそが、他者との関係の中でしか生存できない人間の宿命である。<sup>(注15)</sup>

「奥には人があます」という言葉が表すものは、酒井氏の言われるとおり、他者との関係の中で生きる人間の宿命であり、「心」の中で一貫して流れる一つの主題といえるのではないだろうか。<sup>(注15)</sup> 先生がKに直接に御嬢さんとの結婚のことを伝えられていたら、大きく状況は変わったと考えられるからである。

先生には人生の決定的瞬間において有効的に作用しなかつた〈自然の衝動〉が、「私」の場合の〈自然の衝動〉は、有効的に働いたために、「私」は鎌倉の海で先生を見つけ出し、ごく自然に先生を慕わしいと感じるようになり、「温かい」(上 七)と思える関係を築くことができたのである。<sup>(注16)</sup>

これまで「然し私の過去はあなたに取つて夫程有益でないかも知れませんか。聞かない方が増かも知れませんか」(上 三十一)と「私」に言っていた先生の心情は、「私の過去は私文の経験だから、私文の所有と云つても差支ないでせう。それを人に與へないで死ぬのは、惜いとも云は

代精神の顕現にもなり得ている。(注1)

れるでう。私にも多少そんな心持があります。」「下 二」という心情になり、「何千萬とある日本人のうちで、たゞ、貴方丈に私の過去を物語りたい。」「下 二」という気持ちに変化して、遺書の最後では、「私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。」「下 五十六」というように、「私」一人に向けたものから、次第に、更に不特定多数の人へと向けたものへと遺書を高め、普遍化させているのである。その点から、受け取り手である「私」の存在によって、先生にとって遺書が意味のあるものへと変化していったことが窺える。

「私」が生きる「現代」という時代は何を表すものなのだろうか。相原和邦氏は次のように言われている。

「行人」においては性格の違和を中核としつつ、最後にそこに近代という時代の「宿命」が捉えられ始めていた。「こゝろ」に至ると、そこに「有つて生れた性格」と「時勢の推移」の問題があるという形で、個人と時代を統合する目が発見されている。前近代を引き継いだ「明治の精神」と大正以後に通う「自由と獨立と己れとに充ちた現代」はともにK・先生・「私」の特殊な個性を媒介としつつ、それをこえた時

先生が「私」に語りかける「現代」という言葉の先には、「私」と同じ時代に生きる人々がいた。先生の遺書は明治という時代の終焉とともに、新しい時代の始まりを示唆しており、同時に新しい時代への危惧も示している。

#### 四

本論のまとめとして、「私」は父から物質的な命を受け取り、先生からは精神的な命を受け取ったということが言える。先生が遺書を託す「私」という人物が、どのような家族を持っているか、どのような考えを持っているのか、「私」をこそ、『心』において描く必要があつたのではないだろうか。

当然ながら先生と「私」は別の人間である。だからこそ、先生の言葉や、その生き方をしっかり見つめることが、「私」には可能なのである。田舎に故郷を持ち、財産を奪われる心配をしたことのない「私」に、先生は自分との相違を見出した。「私」は先生の遺書を受け取り、自然の衝動によって、危篤の父を置いて、東京にいる先生のもとへと向かった。「私」には、近代的な高等教育を受けたとい

なつなかりは、先生と「私」の「同情の糸」によって示されている。

う先生との共通点も見られるが、「私」は、先生が自身もそうでありたいと願って、得られなかった、自然の感情を持ち、自然の感情で動くことの出来る青年だったのである。先生より少し先の未来を生きていくはずの「私」であり、田舎の父の影響を受けた「私」であるからこそ、先生と別個の人間であつたがために、先生への興味を抱くようになり、先生が命を絶つた現在でも、より一層尊敬の念は深くなりこそすれ、慕う気持は薄れていないのである。『行人』において、一郎は、最も近いはずのところの家族から一人乖離し、孤独のうちに生きていた。同僚であり、友人である日さんへ心のうちを告白するという点は、先生が「私」に遺書を託すという点と共通している。<sup>(注18)</sup>しかし、最も大きな違いは、「私」が、先生と初めて出会つてから、先生がその死を迎えるまで、丹念に交流を綴っていることである。先生がどのような人間であつたかを、すべて描きさるうとしている点である。生きる世代が違い、成長してきた環境も違い、考え方や感じ方も違う二人の人間が、偶然の中で出会い、ただ真面目という一点のみでつながり、片方が死した後もそのつながりは絶えることがない。先生と「私」のそのようなつながりをこそ、作者は『心』で描きたかつたのではないだろうか。『心』における一番確か

(注1) 「先生の卒業証書は何うしました」と私が聞いた。

「何うしたかね、——まだ何処かに仕舞つてあつたかね」と  
先生が奥さんに聞いた。

「え、たしか仕舞つてある筈ですが」

卒業証書の在処は二人とも能く知らなかつた。(上)

三十二)

卒業証書を大事に扱う「私」の両親と先生夫婦とが、対照的に書かれている場面であると考えられる。

(注2) 「私」が父と先生を比較している様子は次の場面にも表れている。

私は此不快の裏に座りながら、一方に父の病気を考へた。父の死んだ後の事を想像した。そうして夫と同時に、先生の事を一方に思ひ浮べた。私は此不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺めた。

(中 十一)

作中において、かなり意識的に「私」に父と先生を比較させている場面であると考えられる。

(注3) 下宿時代、先生がKを出し抜こうとして、御嬢さんに結婚を申し込む以前に、御嬢さんや奥さんが既に先生を結婚相手として考えていたと思われる場面を次に挙げる。

①さつき迄傍にゐて、あんまりだわとか何とか云て笑つたお嬢さんは、何時の間にか向ふの隅に行つて、脊中を此方へ向けてゐました。私は立たうとして振り返つた時、

其後姿を見たのです。後ろ姿丈で人間の心が読める筈はありません。お嬢さんが此問題について何う考へてゐるか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚の前にして坐つてゐました。其戸棚の一尺ばかり開いてゐる隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めてゐるらしかつたのです。私の眼はその隙間の端に昨日買つた反物の端を見付け出しました。私の着物も御嬢さんの同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。(下)

十八)

②奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だと云ひました。本人の意向さへたしかめるに及ばないと明言しました。(中略)

奥さんは、

「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませんから」

と云ひました。(下 四十五)

①に挙げた御嬢さんが二人の反物を重ねて眺めるという行為は印象的であり、②に挙げた先生が御嬢さんとの結婚を申し入れる場面であるが、奥さんはさして長考もせず即答していることから以前からも、御嬢さんも奥さんも、先生を結婚相手として大いに認めていたということが窺える。それでも先生は「後ろ姿丈で人間の心が読める筈はありません」(下十八)と言っていることから、先生にだけは、本当に御嬢さ

んに好意を持たれているということに気が付かなかつたのだということが言えよう。先の場面は、Kが下宿に訪れる以前  
の場面であることから、もし先生が御嬢さんとの結婚に踏  
み切ることが出来ていたなら、また小説の展開に大きく作用  
する場面でもあった。

(注4) 次に挙げる場面にも、先生の死に対する意識が表れている。  
先生は是等の墓標が現す人種々の様式に対して、私程に  
滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓  
石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼是云ひ  
たがるのを、始めのうちは黙つて聞いてゐたが、仕舞に  
「貴方は死といふ事実をまだ真面目に考へた事がありませ  
んね」と云つた。(上 五)

すべての人間が、死んだのちにも生きていた頃の地位を知  
らしめたいと願うことに、先生が否定することはない。先生  
には、自分の生きた証を遺したいと思う人間の心情が分かっ  
ていたのではないだろうか。

(注5) 静には子供が居らず、「私」の母であるお光には子供がい  
ることが相違であると本文中で記したが、「私」を含むお光の子  
供たちもまた、家には関心が薄く、先生の家と同じく、「私」  
の家も絶えることとなる可能性は考えられる。

(注6) 先生と「私」を繋ぐ表現として「遠眼鏡」を例に挙げた  
が、先生の方は比喩表現としての「遠眼鏡」であり、「私」の  
方は卒業証書を丸めて見た実物としての「遠眼鏡」が描かれ  
ていることに留意しておきたい。同じ表現が為されている

が、二つの「遠眼鏡」に厳密には差異のあることが、先生と  
「私」が完全に一致する存在でないことを示しているように思  
われる。藤井淑禎氏は先生の「遠眼鏡」という表現について、  
先生が自身の結婚の早さについて戸惑いを示すことにおいて、  
「一般的にはむしろその大きさをそが『実物大』であつた」(藤  
井淑禎『漱石文学全註釈12』若草書房 平成12・4 210頁)  
とされており、「先生の一人称記述を相対化することが読者  
に求められていたのではないか」(同)と指摘されている。本  
論文の第三章第二節でも「眼」を含んだ熟語についての「心」  
における意味について述べている。

(注7) 三浦泰生「漱石の「心」における一つの問題」(『日本文  
学』13巻5号 日本文学協会 昭和39・5 347頁)

(注8) 『大言海』(富山房 昭和9・8)によると、「二人、心  
情ヲ同ジクスルコト。又、己レガ身ニ比ベテ、他ノ境遇、状  
態ヲ己レニ移シ、情緒ヲ共ニスルコト。アイミタガヒミニ、  
オモヒヤルコト。」という意味が挙げられている。

(注9) 竹盛天雄「初出稿「心」先生の遺書」(二〇〇十)を読む」  
(竹盛天雄著『明治文学の脈動 鷗外・漱石を中心に』 国書  
刊行会 平成11・2 356頁)

(注10) 山崎正和「淋しい人間——夏目漱石」(山崎正和著『淋  
しい人間』 河出書房新社 昭和53・8 13頁)

(注11) 関谷由美子「『心』論——〈先生〉と呼ばれた男——」  
(関谷由美子著『漱石・藤村〈主人公の影〉』 愛育社 平成  
10・5 90〜91頁)

(注12) 「或は個人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かかもしれません」(下 五十六) という記述からも、先生は「私」との相違をこの場面で強調しているといえる。先生に影響を受けることで「私」の考え方が変化していく、ということは窺える。「私」はやはり先生と「同情の糸」(上 七) を結ぶことができる人物であり、それは先生との境遇の違いの性質の違ひのある、別々の人間であつたからこそその関係であるといえよう。

(注13) (注11) に同じ90頁

(注14) 酒井英行 「『こゝろ』——「先生」への疑念——」

(酒井英行著『漱石 その陰翳』 有精堂 平成2・4 263頁)  
酒井氏は、同論文において、先生について次のように述べられている。

「いったい、いつ「平生の私」から逃れられるのか。もはや死をおいて他にない。(中略) 人間は誰でも「奥には人があます」という関係の中にいるのであり、そこで「私の自然」(良心) が發揮できないというのであれば、その存在が悪性の「平生の私」でしかないのだ。そのような良心は理屈の上のものではなく、無いのと同じだ。(中略) 自己否定を重ねながら、実は自信にみちた自己肯定の上に立っているのが、「先生」である。(同 264頁)

先生は、Kとの悲惨な過去を経て、遺書を書く段階となつて、「平生の私」を見つめようとしているのであり、意識的に肯定的な意味で使われている「私の自然」という言葉とともに考

えれば、「平生」という言葉自体に、自らの悔恨と内省が込められているのは明らかといえよう。それは自己否定の表れといえるのではないだろうか。

(注15) 他者との関係の中で生きる人間の宿命は、「私」にも見られるものである。

私は死に瀕してゐる父の手前、其父に幾分でも安心させて遣たいと祈りつゝある母の手前、働かなければ人間でないやうにいふ兄の手前、其他妹の夫だの伯父だの叔母だの、手前、私のちつとも頼着してゐない事に、神経を悩まさなければならなかつた。(中 十五)

「中」においては特に、それまでそれ程深く考慮してゐなかつたであろう「私」が、家族に対して、また自分の将来に對して、考え、悩む描写が増えている。

(注16) 先生の(自然の衝動) が働いた場面として、次のような描写があることにも注意したい。

其時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「済みません。私が悪かつたのです。あなたにも御嬢さんにも済まない事になりました」

(中略)

Kに詫まる事が出来ない私は、斯うして奥さんと御嬢さんに詫びなければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらくくと懺悔の口を開かしたのです。(下 四十九)

運命を左右するような決定的な場面において、先生の(自

然の衝動)が働いても、時が遅すぎ、Kへの謝罪が果たせなかつた場面であるが、先生にも「自然」の衝動が生まれていくことにも指摘しておきたい。その一方で「私」の場合は、「自然」の衝動によって鎌倉の海で先生を見出し、危篤の父を置いて、東京の先生の所へ向かうという運命を切り開いている。この先生と「私」の相違の原因は何なのか。作者が意図的に描いているのかは定かではないが、指摘しておきたい。

(注17) 相原和邦 「一つの終局——「こゝろ」」(相原和邦著『漱石文学の研究——表現を軸として——』明治書院 昭和63・2 335) 336頁)

(注18) Hさんは一郎を完全に肯定し、「私」もまた先生を完全に肯定しているということも共通点として挙げられる。

先生と「私」の父 比較表

相違点	
先生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「大学出身」(上十一)</li> <li>・卒業証書の在処を忘れる</li> <li>・「口で祝つてくれながら、腹の底でけなしてゐる」(上三十七)</li> <li>・「西洋人」(上二)</li> <li>・「汽船に乗つて外国へ行くべき友人」(上 十) 「先生と同郷の友人で地方の病院に奉職してゐるもの」(上十五)</li> <li>・あまり気にしない</li> <li>・都会</li> <li>・潔癖 「汚れたのを用ひる位なら、一層始から色の着いたものを使ふが好い。白ければ純白でなくちや」(上三十二)</li> </ul>
「私」の父	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学を出ていない</li> <li>・「私」の卒業証書を大時に扱う</li> <li>・「それ程でないものを珍しさに嬉しがる父」(上三十七)</li> <li>・「子供の時分から仲の良かった作さん」(中 十三)</li> <li>・私の卒業祝いの際に田舎の客を気にする</li> <li>・田舎</li> <li>・潔癖とは言い難い 「父は庭へ出て何かしてゐた所であつた。古い麦藁帽の後へ、日除のために括り付けた薄汚ないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻つて行つた」(中 一)</li> <li>しかし「潔癖な父」(中 十三) という表現もあり、共通点としても考えられる</li> <li>・「私」の就職について積極的である</li> <li>・作中には描かれず</li> <li>・「古い家」(中三) であると強調されている</li> <li>・「私」の他に長男と長女がいる</li> <li>・病身</li> </ul>
学歴	卒業証書に対して
友人関係	「私」の卒業に対して
世間体	在所
在所	潔癖さ
地位に対して	過去
家	家族・子ども
身体	丈夫



<p>病氣に対して死に對して死に方 淋しさ</p>	<p>・「死病に罹りたい」(上二十一) ・至つて健康であるが、死はいつも意識にある ・自殺 一人で死ぬ ・「私は淋しい人間です」(上七) 人間の存在そのものに關わるような孤独であり、人へは向かわない淋しさ</p>	<p>・「父は明らかに自分の病氣を恐れてゐた」(中七) ・重い病にあつて覚悟を定めていように見えるが、死を本當に受け入れてはいない ・腎臓病による死が予想される 家族に看取られる ・「御前が東京へ行くと宅は又淋しくなる」(中 八)「私」の淋しさとも共通する、人を求める淋しさ</p>
<p>妻への心配</p>	<p>・物質的な事柄のみの心配で、妻のことを誰にも頼まない「おれが死んだら此家をお前に遣らう」(上三十五)「私があなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。」(百十) ・常に考へている「私は未來の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思ふのです」(上十四) ・私に宛てて長い遺書を書く</p>	<p>・一人田舎家に遣す心配をして、家族に頼む 物質的な事柄への心配よりも妻の精神的な淋しさを重視「おれが死んだら、どうかお母さんを大事にして遣つてくれ」(中七) ・「未來を心配しながら、未來に對する処置は一向に取らなかつた」(中七) ・遺書は書かない「父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた」(中 十六) ・乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。「大變だ大變だ」と云つた(中十二)「乃木大将に濟まない。實に面目次第がない。いへ私もすぐ御後から」(中十六) 乃木大将への殉死を思ふ</p>
<p>自分の未來に對して 遺書</p>	<p>殉死の受け止め方</p>	<p>・財産や妻のことも頼まず、精神的なものを私に託す 「私」一人へ宛てられた特別なもの</p>

共通点

右：先生

左：「私」の父

名前

妻

「おれが死んだら」  
という言葉業

死の時期

家の崩壊

矛盾

潔癖

學問に対して

・名前がなく、妻には名前があること

・静（遺して死ぬ）

・御光（遺して死ぬ）

・「静、おれが死んだら此家をお前に遣らう」（上三十五）

・「おれが死んだら、どうかお母さんを大事にして遣つてくれ」（中十）

・「私」の父とほぼ同時期と予測される

・先生とほぼ同時期と予測される

・先生の家も「私」の父の家も後継者のいないことが予測されるため

・「私は實際あの電報を打つ時に、あなたの御父さんの事を忘れてゐたのです。其癖あなたが東京にゐる頃には、難症だからよく注意しなくつては不可いと、あれ程忠告したのは私ですのに。私は斯ういふ矛盾な人間なのです」

（下 一）

先生は自分の矛盾を自覚している

・「自分が死んだ後、この孤獨な母を、たつた一人伽藍堂のわが家に取り残すのも亦甚だしい不安であつた。それなのに、東京で好い地位を求めると云つて、私を強ひたがる父の頭には矛盾があつた」（中 七）

「私」の父は自分の矛盾を自覚していない

・「成程先生は潔癖であつた」（上三十二）

・「潔癖な父」（中十三）

・厳密な理由は異なつてはいるが、否定的

先生「近頃は知らないといふ事が、それ程の恥でないやうに見え出したものだから、つい無理にも本を読んで見やうといふ元気がなくなつたのでせう」（上二十五）

父「學問をさせると人間がとかく理屈つぽくなつて不可ない」（中三）「子供に學問をさせるのも好し悪だね。折角修行をさせると、其子供は決して宅へ歸つて来ない。是ちや手もなく親子を隔離するために學問させるやうなものだ」（中七）

新聞への関心

明治天皇の死につ

いて

「私」から見た共

通点

・先生 読んでいる (下五十四)

・父 新聞を好んで読む「父は平生から何を措いても新聞丈には眼を通す習慣があつて」(中十二)「好きな新聞も手に取る氣力がなくなつた」(中十三) 二人とも明治天皇と乃木大将の死を新聞を通して知ることになる

・先生も「私」の父も影響を受けている

・「両方とも世間から見れば、生きてゐるか死んでゐるか分らない程大人しい男であつた」(上二十三)「他に認められるといふ小点からいへば何方も零であつた」(上二十三)